

ジェイムズ・ジョイスの「委員会室での蔦の日」

米 本 義 孝

ジョイスの作品に初めて触れる場合には、『ダブリンの人びと』では「アラビー」や「痛ましい事故」のような作品から入ったほうが無難であろう。主人公に焦点がしぼられ筋も一貫していて理解しやすいからである。それに対し、「委員会室での蔦の日」(“Ivy Day in the Committee Room”、以下略して「蔦の日」)は、筋らしい筋もなく、市議員補欠選挙を控えた事務所で、選挙運動員たちがとりとめない会話をするだけである。そのうえ、直接話法による会話と状況を短く報告するだけの客観描写とに終始しており、語り手が一連の出来事を裏面から説明したり瞬時の出来事に関する情報を提供することはない。登場人物個々の立場とか内面の説明もない。また、短編(ジョイスの短編としては長く前作「痛ましい事故」の約二倍の長さである)としては多すぎる八人の人物が登場のうえ、彼らの噂する人物が十五人もいる。この種々雑多な人物構成にわれわれは食傷気味になって、ある人物に共感したり感情移入することは少ない。しかも登場人物たちによる発言は思いつきや偏見や愚痴であるため、一読するだけなら盛り上がり上の乏しい作品という読後感をもってしまふ。

しかし、『若き日の芸術家の肖像』や『ユリシーズ』を読んでジョイス文学の真髓がわかってくると、逆に魅力のない内容や人物からなる「蔦の日」に文学的価値を見いだしたくなるであろう。ここでは人物間の蔦藤と話題とが微妙に関連しあい、ダブリンの政治の麻痺という主題に収斂されていることに気づくことができるからである。

ジョイスは『ダブリンの人びと』を四つの相に分けた。四番目の相の「社会生活」を描いた三編のうち、「蔦の日」では政治を、「母親」では芸術を、「恩寵」では宗教を各々扱っている。「社会生活」の最初に「蔦の日」をもってきたのは、主役を特に限定しないということを目立たせて、この相では個人でなくダブリンの社会生活者全体を描くのだという作者の意図かもしれない。このように、リアリズムに徹する新しい表現形式として、ジョイスは、余分の説明を省き対話を主体としてダブリンそのものを再現したのである。

「蔦の日」への批評家たちの評価は高く、難解な作品でありながらペンギン版『英国短編小説選』に「死んだ人びと」ともに入っている。ジョイス自身もこの作品に満足していたということは、弟のスタニスラスの回想や『ダブリンの人びと』の初版を出したグラント・リチャーズへのジョイスの手紙から知ることができる。

二

この短編は時と場所の一致の法則が守られている一幕一場劇ともいえる。このことは、「委員会室での蕙の日」という表題からしうかがえる。「蕙の日」とはアイルランドの独立運動の偉大な指導者であったチャールズ・ステュアート・パーネル（一八四六～九一）が没した十月六日をいい、毎年この日に彼の支持者たちは彼の再生のしるしとして蕙の葉を服の襟につけて記念した。そして、登場人物たちの話しぶりから、イギリス王のアイルランド訪問の前年であることがわかる。「委員会室」とはダブリンの中心部のウィック通りにある市議員補欠選挙のために設けられた、国民党の立候補者の選挙事務所を指す。こうして「蕙の日」は、一九〇二年十月六日の夕暮れ時の殺風景な二階の選挙事務所でかわされる会話を主体としており、人物の発言は作品の最後の一行以外はすべて直接話法で記述されている。会話でない部分は、劇におけるト書きの要素をもつていて、伝達部は、分詞構文は別として修飾語句を伴わない簡素な文体で、対話の後もしくは間に置かれている。「この作品に先行する十一の物語は主人公たちの心理状態を探究したもの」であり、第三者による語りが時にはそのまま主人公の意識や言い回しを表現していた。それに比べ、この作品では第三者が各人物を描くのは身なり、体格、身振りだけであり、その劇としての特徴が歴然としてくる。

この作品で重要な存在となるのは舞台に登場しない死者のパーネルであり、どんな話題もパーネルとの関連において意味をもつのである。主役もなく締まりのない会話が終始するこの物語は、死後もアイルランド人の心に力をもつパーネルを暗示的に使って、作品に

有機的な統一をあたえているといえる。ただし、彼の名前が口にのぼり議論の対象とされるのは作品の終わりのほうで、それまでは登場人物たちの対話や細部の描写のいたるところにその影が見え隠れしているだけである。

パーネルは一八七五年下院議員になって以来、つねに母国の自治権獲得のために戦った。その後国民党の党首になり、英国議会においてアイルランド自治法案通過に全力をそそいだ。しかし母国の独立にあと一步と迫ったとき、友人の妻との姦通事件が問題となり、その責任を問われて政界から退いた。一八九〇年十二月にアイルランド国会議員団によって、その政治的指導者としての地位を事実上追われた場所がロンドンのウェストミンスターにある国会議事堂の「委員会室」十五号室である。ジョイスがダブリンにある国民党の「委員会室」を選挙事務所を設定したのは、このウェストミンスターの「委員会室」と関連づけるためである。パーネルの失脚には国民党員の裏切りやカトリック教会の糾弾（彼はプロテスタント）が大きく影響し、彼は失意のうちにその翌年急死した。すると、「蕙の日」に彼の後継者たちはダブリンの「委員会室」で、かつての党首の政治理念や行動を否定したりして、裏切る罪を再演することになる。このような裏切られたパーネルはキリストに、裏切った国民党員やその後継者たちはユダにたとえられた。伝説上の人物となった彼はモーゼやシーザーさらにはヘムレットの父にたとえられてもいる。このパーネルの問題は、ジョイスの生涯を通じて脳裏から離れないテーマで、『若き日の芸術家の肖像』の有名なクリスマスマスの夕食の場面から、『エリシーズ』の第七、十二、十四、十六挿話、そして『フィネガン徹夜祭』へと受け継がれていく。また、死人が生きている人に大きく影響するというテーマは、「死んだ人びと」

『ユリシーズ』の第六挿話、『フィネガン徹夜祭』へと展開されていく。

三

「暮の日」はダブリンにおける二十世紀初頭の政治とその退廃ぶりを描いた短編であるが、劇の要素が強く人間関係が複雑に入りこんでいるため、人物のからみあいを説明することが作品理解に不可欠となる。登場する際の所作や発言に彼らの性格と舞台での役柄とが端的に現われているので、そのような場面をとりあげてみたい。八人の人物を登場順に紹介すると次のようである。

ジャック老人……………選挙事務所の管理人。

マッシュウ・オコナー……………国民党公認候補者ティアニーの運動員で優柔不断な国民党員。

ジョウ・ハインズ……………ジャーナリストでパーネルの崇拜者。

ジョン・ヘンチー……………運動員で現実主義的な国民党員。

キオン神父。

居酒屋の店員。

クロフトン……………保守党員であるが、ティアニーの運動員になっている。

ライアンズ……………運動員で、パーネルの道德問題を非難する国民党員。

物語は、ジャック老人が部屋を暖めるため懸命にあおいでも、石炭の燃え殻は炎をあげないという場面からはじまる。彼は自分の道楽息子のことをオコナー相手に嘆いている。オコナーは、ティアニ

ーの選挙運動員だが雨降りを理由にして事務所でたむろし、巻き煙草を作ったりしながら老人の愚痴に適当に合わせている。ここまでが物語の導入部である。そこへハインズが登場し、二度も「暗い所でなにやってるんだい？」と言うと、ジャックが二本のろうそくに火をつけ、部屋の中央の机の上に置く。ろうそくの火は舞台照明の役をし、それがともされて明るくなると舞台が殺風景な選挙事務所であることがわかる。そしてとりとめない政治談義がハインズの質問からはじめられ、政治の退廃ぶりが暴露されていく。

——やっこさんお前さんたちにもう金を払ってくれたかい？

——まだよ、とオコナー氏は言った。今晚おれたちを見殺しにするなんてことしてほしくないな。

ハインズ氏は笑った。

——おうおう、払ってくれるよ。心配すんなよ、と彼は言った。——その気があるならさっさと払ってもらいたいもんだな、

とオコナー氏が言った。

——どう思う、ジャックよ？ とハインズ氏は嫌味たらしくと老人に言った。

老人は火のそばの自分の席に戻りながら言った。

——とにかく金をもつてないというわけじゃないんですよ。もう一人の文無し職人とは違いますぜ。

——もう一人の文無し職人って？ とハインズ氏は言った。

——コールガン、と老人は軽蔑したように言った。

ハインズは、登場人物中パーネルに誠実な唯一の男であり、エドワード七世の来訪に賛成する気配の国民党員のティアニーに反感を

もっている。エドワード王が皇太子時代にアイルランドを訪問した際、パーネルはその公式歓迎会に反対したのである。なお、ハインズの「嫌味たらしく」(satirically)は、ティアニーに依存し信頼をおいている老人の「軽蔑したように」(scornfully)と対照的な語であり、二人は互いに悪感情を抱いている。ハインズがティアニーの対立候補者コールガンを弁護して熱弁をふるったり、三人で昔を憧憬したりしていると、一人の男が慌ただしく入場する。

そのときこざわしく小柄な男が戸を押して入ってきた。鼻をすすり冷えきった耳をしていた。彼は素早く火のそばへ歩いていき、まるで火花をつくりだそうとするような勢いで両手をこすり合わせた。

——金ないぜ、諸君、と彼は言った。

——ここへお座りなさいよ、ヘンチーさん、と老人は自分の椅子をすすめて言った。

——いや、かまわねえでくれ、ジャック、かまわねえでくれ、とヘンチー氏は言った。

彼はハインズ氏にそっけなくうなずき、老人があけてくれた椅子に腰をおろした。

ヘンチーもハインズ同様、選挙運動員たちへの奉仕金をまっ先に口にする。彼は、金払いの悪いティアニー個人を中傷し、その出生の秘密や父親が酒の密売をしていたことまで暴露する。党員の大部分が赤貧で悩んでいるのに、公認候補者ティアニーは居酒屋の主人であり、救貧法管理員を表看板にしながら、市内に三箇所も事務所をかまえる多額納税者である。この資産家は、選挙事務所への石炭の

支給をけちり、支払いの金を延引したりして、運動員たちに十分な満足をあたえていない。政界の端くれたる運動員たちは、彼に信頼や献身的な行為を示すどころか、激しい侮蔑と不信を抱きながら、わずかな手当てと陣中見舞いの酒のために働いているのである。

ハインズが再登場を告げて退場すると、ヘンチーはハインズに牙先を変える。コールガン陣営のスパイとして偵察にきたと言ったり、その父親を対照的に褒めたりする。ヘンチーがハインズに好意をもっていないことは、引用の「そっけなく」(cuttily)という語からも知ることができる。ヘンチーは、話の主導権を握りたがる人物であり、過激な民族独立運動の一派を英国側のスパイだとまで極論する。

ここでキオン神父が登場し、選挙運動出納係(「恩寵」で市長製造者として言及されているファニング)がいないと知るとすぐに退散する。キオンの僧職者としての資格や現市長の生活状態が話題になっていると、居酒屋の店員がティアニーからの差し入れのビールを届けて置いていく。運動員たちはその話しぶりのなかにひねくれた心をあらわにしていたのが、ビールで陽気になり、ヘンチーなどはティアニーへの評価を変えてしまう。わずかなビールが立候補者に対する価値を左右するのである。このあたりは醜悪のなかの滑稽さがにじみでているといえる。やがて二人の男が登場する。

一人はでっぷりと太った男で、紺サージの服がなだらかな体から今にもずり落ちそうにみえた。若い雄牛の顔つきに似た大きな顔で、丸く見開いた青い目と白髪まじりの口髭をした男だ。もう一人は、ずっと若くひ弱な体つきで、やせこけた顔をきれいに剃りあげていた。彼はひどく高い二重襟をつけ、縁の

幅が広い山高帽をかぶっている。

——よう、クロフトン！ とヘンチー氏が太った男に言った。噂をするとなあ……。

——お酒どっからきたんです？ と若い男がたずねた。雌牛が子を生んだんですか？

——おう、もちろん、ライアンズがまっさきにかぎつけるってわけだ！ とオコナー氏は笑いながら言った。

——あなたたちはそういうふうにして選挙運動してるんですか、とライアンズ氏が言った。クロフトンとぼくが外で冷たい雨のなかを票集めてるっていうのに？

——ちえっ、なに言ってるやがるんでえ、とヘンチー氏が言った。おめえたち二人がだな一週間かかってとんだけ票を集めようと、おれなら五分でもっと集めてみせらあ。

——スタウト二本開けてくれよ、ジャック、とオコナー氏は言った。

——どうやってです？ と老人は言った。栓抜きがないっていうのに？

——さて、さて！ とヘンチー氏は素早く立ちあがりながら言った。こういうちょっとした芸当見たことあるかい？

彼は机から二本の壘を取って、火のそばへ持っていき、暖炉内部の台にのせた。

保守党員のクロフトンはヘンチーの呼び掛けに答えず、以後も無口でおしとおす。ヘンチーの言葉をさえぎって絡むのはライアンズであり、その気難しい性質は彼の外見や発言にうかがわれる。ともに国民党员で多弁のこの二人は英国王の訪問からパーネルへと話題

を展開させて対立していく。「土」にも栓抜きがなくて大騒ぎをする場面があったが、ここでも栓抜きを居酒屋の店員が持ち帰ってしまふ。そのためビール壘を火で暖めていると、栓が気の抜けた音をたてて飛ぶ。なお、場の雰囲気や和らげるオコナー、雑用係のジャックというように、五人の役柄が察知できる。

ヘンチーがパーネルの勇壮ぶりを再現しているところへ、パーネル信奉者のハイアンズが再登場する。これで関係者の顔が揃い大詰めをむかえるのだが、六人の座っている位置に注目したい。ジャック、オコナー、ヘンチーは暖炉のそばに座り、クロフトンは離れて箱の上に腰かけている。ライアンズは中央にある机の端に腰かけ、その近くにはハイアンズが腰を下ろす。席の位置にも作者の工夫がある。

ハイアンズはこの場面ではよそよそしく無口であるが、求められて自作の「パーネルの死」という感傷的な哀悼詩を一同の前で朗読する。そして一同が拍手し、詩に対してありきたりの賞賛を捧げたところで幕となる。

四

「蕪の日」は短編ながら八人も登場するが、それぞれの人物は驚くほど明確に描かれている。最初に紹介されるのはジャック老人である。

その半球形の山が薄くおおわれると、彼の顔は暗闇に消えた。しかし、ふたたび火をあおぎだすと、彼のがみこんだ影が向かい側の壁を登っていき、その顔がゆっくりと光の中にまた現われた。老人の顔で、ひどく骨ばっていて毛深い。湿った青い目が火を見てまばたき、湿った口が時おり開き、閉じると

きには一、二度機械的にもぐもぐやった。

ジョイス作品の他の老人と同じように、ジャックも軽んじられている。大酒飲みの道楽息子が逆襲し、ヘンチーが「老人があけてくれた椅子」を当然のようにとったりすることからも明らかである。ジャックは、ティアニーに忠義だてして、ハインズに反感をおぼえるし、またオコナーがティアニーを宣伝したカードを燃やして煙草の火をつけるときに「マッチを持ってくる」と言つてそれを阻止しようとする。けれども効果はない。客観描写では名前だけでなく老人と言及されるように、「あの頃はよかつたですなあ！」と過去を憧憬するだけの老人である。「かがみこんだ影が向かい側の壁を登つていき」という表現で一瞬異様な人物かと思わせながら、すぐそれを打ち消して、精力のうせた老人であることを明確にし、作品におけるとるに足らない彼の立場を匂わせている。

ジャックの次はオコナーが紹介される。

オコナー氏は灰色の髪をした若い男で、顔はたくさんのでき物やにきびで醜くなっているが、ちょうど紙巻き用の刻み煙草を形のいい円筒に巻きあげたところだった。だが、話しかけられると、せっかく作ったものを考えこみながらこわしてしまつた。それからふたたび考えこみながら煙草を巻きはじめ、ちょっと思案してから意を決して紙をなめた。

ここの描写でもわかるように、オコナーは精神的にも肉体的にも年寄りくさく、行動も緩慢である。彼は積極的に自分から話しかけることがなく、他人の意見に同意か反対するだけであり、優柔不断で独創性のない人物である。これは当時のアイルランド青年の典型

であろう。しかしこの愚鈍で決断を欠いたオコナーは、終始部屋にとどまって、他人の意見の聞き手をつとめ、主観に頼らず、時には他人の偏屈な意見を諫めたり、部屋の険悪な雰囲気緩和したりして、議事進行係のような役割を演じる。

ハインズとヘンチーは対照的な人物として描かれている。ハインズは、パーネルに純粹な感情で忠誠を誓い、その再生を願つて蕁葉をつけている。パーネルに対する破廉恥な論議が下火になった頃に再登場すると、作者はこの信奉者にその光景を見せないために意図して一時不在にしたのかとさえ錯覚させられる。

それに比べ、ヘンチーは無節操な都合主義者である。この偽善者はハインズの前ではティアニーを誹謗し、ハインズが部屋から出ていくと、今度は彼を非難する。キオンに親切そうな態度をとりながら、その姿が見えなくなると、とたんに彼を嘲り、ビールが届けられると、今までとはうって変わって、ティアニーを褒めそやす。ハインズを英国側の手先きだと仄めかし、さらに売国奴を槍玉にあげるが、自分は国民党員でありながら英国王の来訪に賛成して、パーネルの遺志を無視する発言を平気でする。彼の言行が一致しないことは、老人の席をとつてしまつたり、居酒屋の店員に自らビールを振る舞いながらあとでその少年を非難することなどにみられる。時には混乱に乗じようとする印象さえあたえ、言葉使いも登場人物中一番汚い。

表面的には以上のようなようであるが、この二人には逆の評価もなりたつ。ジョイスの作品には一般に曖昧なところがあつて、それが彼の作品の土壌を潤わせ、その芸術的效果をたかめている。「蕁の日」も曖昧性に富んでいることは、この二人の人物からもうかがわれる。ハインズは、パーネルに忠実であつても、過去の英雄像を憧憬

するだけで、自ら行動しようとしなない。コールガン支持の態度を表明しても積極的なものとは感じられない。感傷的な詩の朗読も他の人物たちを政治的行動に駆りたてる力はない。

ヘンチーはハインズのように口先だけ忠誠をほらう感傷家ではない。アイルランドの資本の貧困を認め、国の利益のために英国を利用すべきだという現実主義者である。このような打算的な男が案外母国を救うかもしれない。彼は登場人物のなかでただ一人気炎をあげ、敏捷で若々しい。そのご都合主義も、ビールが届けられたとたんティアニーへの評価を改めるところなどは、ユーモラスな感さえあたる。また、ビールの栓のあけかたを提案したり、議会におけるバーネルの勇壮ぶりを「坐れ、きさまら犬ども！ 座れつたら、野良犬どもめ！」と調教師かサーカスの猛獣使いのように熱演するところは「喜劇的息抜き」を感じさせる。

この作品において、舞台上姿を見せない第三者が各人物について語る場合、自らを室内に置く読者または舞台正面の観客を意識して、その位置は室内にある。その視点でどの人物も入室後に紹介されるため、彼らの姿は明確である。しかし、キオン神父の場合は、彼が戸口に立っているために、その姿はかすんでいる。

貧しい聖職者か下っぱ俳優に似た人物が戸口に姿をみせた。黒い服のボタンが小柄な体にびつたりとはめられており、その人が聖職者の襟をつけているのか俗人の襟をつけているのかどちらとも言いようがない。むきだしのボタンがろうそくの光を照り返している、みすぼらしいフロックコートの襟が首のまわりで立ててあるからだ。彼はかたい黒いフェルトの丸い帽子をかぶっている。顔は雨の滴で輝いており、湿った黄色いチーズ

のように見えた。ただ、頬骨のあるところだけが二つのばら色の斑点になっていた。ひどく長い口をふいに開いて、失望の意をあらわし、同時にひどく明るい青い目を見開いて、喜びと驚きの意をあらわした。

——おや、キオン神父さま！ とヘンチー氏は椅子からとびあがって言った。あなたでしたか？ おはいんなさい！

——ああ、いや、いや、いや、いや！ とキオン神父は子供に話しかけるように、口をすぼめて素早く言った。

——はいつてお座りになりませんか？

——いや、いや、いや、いや！ とキオン神父はつましい、やさしい、やわらかな声で言った。どうぞそのままです！ ちょっとファニングさんを捜しているだけですから……。

この作品のなかで語り手による外面描写が一番長いのはキオン神父である。その描写のうち、前半の記述が曖昧なのは彼の位置のせいではあるけれども、この曖昧性は政治屋と癒着している神父の人間性を表わしてもいよう。キオンがサー少佐（密告者やスパイなどを利用し、非情きわまる検挙で悪名をはせ、アイルランドでは裏切り者の典型とされた）や売国奴が話題にされている最中に遠慮がちに戸口に立つため、読者は神父にマイナス像を重ねてしまう。「失望」と「喜び」の両極端の顔の表情や猫撫で声のせりふからは大根役者を思い出させるが、この迎合的な態度はキオンの習癖である。衣服の記述は彼の身分の曖昧性を強める。

D・T・トーチアナによれば、アイルランドでは黄色いチーズの顔色と赤い頬骨はアルコール中毒者にみられる現象とのこと。すると、あとでヘンチーが「やっこさんが来たのをスタウト一ダースが届いたのかと思ったよ」と言うのも、居酒屋の店員がビールを持つ

て登場するのも、物語としての連続性をもつと考えられる。キオンの湿ったチーズのような顔は見る者の気持ち悪くさせ、読者はその下劣さを意識し彼と自己との距離を悟る、とH・O・ブラウンは解釈している。③ジョイスは、演劇でいう「異化」の手法を使って、キオンへのわれわれの感情移入を妨げることによって効果を挙げようとしたのである。

キオンは、身分が曖昧で、退場後ヘンチーから「つらよごし」(Jack sheep)とレッテルをはられ、聖職を剝奪された僧侶とか寄生虫として非難される。パーネルの失墜に加担したのは、カトリックの教会とその聖職者たち(ハインズの詩のなかの「媚びへつらう坊主ども」)でもあるが、金を無心し俗人のように酒を飲むキオンが僧職にあるのを許されているなら、政治と結託する当時のダブリンの宗教は墮落しきっていたことになる。

居酒屋の店員はキオン神父同様出番は少ないが、その人物像は鮮明に描出されている。

ヘンチー氏が少年に言った。

——おい、おまえも一杯飲むかい？

——もしよろしければ、と少年が言った。

老人はしぶしぶもう一本あけて、少年にそれを渡した。

——年はいくつだ？ と彼はたずねた。

——十七、と少年は言った。

老人はもうそれ以上なにも言わなかったので、少年は壘を取って、ヘンチー氏に向かって「だんなさんに心から敬意を表します」と言い、中身を飲みほして、壘を机の上に戻し、口を袖でぬぐった。それから彼は栓抜きを取り上げて、なにか挨拶ら

しきことをつぶやきながら、横向きに戸の外へ出た。

——あれがことの始まりですよ、と老人は言った。

——今のところ、くさびの刃先ってとこだな、とヘンチー氏は言った。

この少年は、敬意を表する相手を即座に察知し、「口を袖でぬぐう」仕草からみてジャック老人の息子のように酒飲みかもしれない。入場だけでなく退場の場合も、戸を横向きにすり抜けるのは、重いビール壘を持って出入りする店員の癖が思わずでたのである。キオンやこの少年のような脇役でも、短い出番の間に身振りや言葉で自己の役割を十分に演じ、その出現でいったん中断されていた会話に話題を提供する。ダブリンの社会生活の実態を説明するのに、ジョイスは無駄な人物はだれひとり登場させていない。

アイルランド保守党は、国民党の党首であったパーネルの敵対者たちで構成され、英国の保守党と同盟を結んでいる少数党である。クロフトンは、その黨員であり、「恩寵」では親英的なプロテスタントの秘密結社オレンジ党の黨員として言及されている。英国人名の響きのある彼が国民党の候補者の陣営で働いている理由を、語り手はこう説明している。

彼は二つの理由で黙っていた。第一の理由は、それだけで充分なのだが、言うことがなにもなかったから。第二の理由としては、この仲間たちは自分よりも劣っているとみなしたから。彼は保守党のウィルキンズの運動員だったが、しかし保守党が候補者を引っこめて、二つの悪のうちのましな方を選び、国民党の候補者を支援することになったときに、彼はティアニー氏

のために働くように雇われたのであった。

対話と周到な客観描写で終始する「蕪の日」に、引用の前半のような登場人物の内面描写がある。これは作者の筆の誤りなのか、意識して表現したのかは不明である。どちらにしろジョイスは、クロフトンという人物の存在をこの場面で過不足なく定着させたかっと思われる。

寡黙の人を決めこむクロフトンは、ヘンチーが三人の英国系の名前をもつ生粋の保守党員を勧誘したと自慢するときでも沈黙を保つ。その彼も二度だけ短いせりふをばく。

▲ポック！▼ 遅ればせながら栓がクロフトン氏の壘からとんだ。クロフトン氏は箱から立ちあがって火のほうへいった。

彼は自分の獲物を持って戻ってくるとふとい声で言った。

——わが党は彼を尊敬してるよ、紳士だったからな。

クロフトンの言葉が、パーネルを政治家としては尊敬しないと仄めかし、その姦通事件が問題になっているときに「紳士だから尊敬する」とは痛烈な皮肉でもある。また、彼は作品の最後で、パーネルへの哀悼詩の感想を問われて、「それはとてもすばらしい作品だ」と言う。政治家としてのパーネルについての意見表明を回避して、前者では態度の問題にし、後者ではレトリックの問題にすり替えたのである。作品中一箇所だけ演劇志向の性格を破ってこの人物の精神のなかに入り込んだり、作品の最後の一文も彼に焦点をあわせていることからみて、ジョイスにとってクロフトンは特別の人物なのかもしれない。

八人の人物はその登場順に二人づつがベアになっている。ライアーズもクロフトンと対照的に瘦せて神経質で饒舌である。病的なほど潔癖で、英国王とパーネルを私生活の道徳面だけで結びつけて二人に反対する。国民党員でも現実派のヘンチーにはなぜ彼が政治問題に道徳をもちこむのか理解できない。なお、クロフトンについては墮落した連中に加わらないという点で、ライアーズについてはその態度が首尾一貫していて公平という点で、各々に好意的な見方もできることに注意したい。

このように政治的思想や信念に欠けていながら政治談義にふけり、時おり衝突もする彼らの集まりは、当時の政治集会や議会のパロディである。パーネルなきあとダブリンの政治家たちは大分裂に陥り、欲得や卑しい便宜主義に基づく党派争いに明け暮れたのである。

五

「蕪の日」の重要なテーマは裏切りである。新旧の世代や親子関係をとうじて作品全体に提起されている。この問題は、冒頭でジャック老人が息子の放蕩を愚痴る場面や「子供らが親父にそんな口をきくなんて世の中いっただいどうなるんでしょうかねえ？」と嘆く言葉のなかに布石として用意されている。そして次々と、ティアニー父子、ハインズ父子、ウィクトリア女王とエドワード七世の母子関係が話題にされ、そのすべての息子たちが会話のなかで非難される。

この場合、M・マガラナーが指摘するように、子が親に、新しい世代が古い世代に交代すれば、そこに進歩があるように想定されている。しかし現実には、オコナーに代表されるように、アイルランドの若者は年寄りじみており、彼らに希望を託すことはできない。他

ならぬ再生の日に若者たちの墮落を提示したところに、作者ジョイスの同世代に対する揶揄が強く感じられる。

ところで、この父と子ならびに裏切りのテーマは、威厳ある父といえるパーネルと彼の不肖の子である後継者たちとの関係において、物語のなかで大きく浮かびあがる。そのため、反抗する息子へのジャックの嘆きをはじめ、親子をめぐる数々の挿話は、パーネルと彼を裏切る後継者たちとの関係に結びつけて、この作品を読むことが必要となってくる。パーネルは生前敵も味方も威圧する声望ある父であった。しかし彼が党首をつとめた国民党の政治家たちの裏切りによって失脚し、失意のまま憤死すると、その後継者たちは遺志を受け継ぐどころか、彼が生涯をかけて戦ってきた自由と独立の精神をも見捨てたのである。

この物語でも、まず国民党公認の立候補者ティアニーが英国王のアイランド来訪を歓迎しようとするのはパーネルへの裏切りである。そのティアニーも選挙運動員たちに裏切られる。たとえば、温厚なオコナーでさえティアニーの選挙運動用のカードをひきちぎってそれに火を点け、彼のティアニーへの支援行為が欺瞞であることを示す。

登場人物のうちでヘンチーは、パーネルの再生の可能性を秘める火に唾をはきかけたり、英国王の来訪に賛成したりして、パーネルを裏切る。パーネルがかつて公式歓迎会に反対したことをオコナーが指摘すると、ヘンチーは「パーネルは死んだんだ」(‘Parnell is dead’)と言う。この言葉は、反対する者はもういないから、英国王を歓迎することに遠慮はいらないという意味である。オコナーも暖炉の火に煙草の吸い殻を投げ入れる。彼が陰悪な雰囲気や和らげるために「死んでしまった今となっちゃあ、われわれはみんなあの人

を尊敬してるんだ」という言葉からは、「パーネルの時代は終わった、彼はやれわれを怖がらせることはできない」という響きが感じられる。ライアンズは、ヘンチーと同じく蕪の葉をつけず、道徳面だけでパーネルを非難する。彼らは国民党員でありながら、このようにしてパーネルの信念や名譽を傷つけている。また、下層階級出身の当時の市長は、パーネルに対する不動の忠誠で知られていたが、ここではその卑しい生活ぶりが嘲笑にされている。これらのパーネルへの裏切り行為は、そのままアイランドの政治家、宗教学家、さらには国民一般に共通のものといえる。

六

この作品では火ならびに火にかけたビール壺の栓の発する音が重要な意味をもっている。火は、ハインズの詩にあるように、パーネルの亡骸を葬った火や、不死鳥として彼がその灰から蘇生する火と連想される。したがって、作品の初めで、オコナーが煙草を吸うために宣伝カードに火をつけるとき、火が彼の襟につけた蕪の葉を照らすことに意味がある。ただしパーネルの精神を受け継ぐ者の少ない現状では、火は彼を再生させアイランドを復活に導く力をもたない。

雨の降る肌寒い夕方でありながら燃料が欠乏し、暖炉の火は弱々しく揺らぐだけである。老人がその世話をするのだが火力はもろあがらない。しかも、舞台照明の役をするろうそくの火が部屋を明るくすると、それと対照的に暖炉の火は陽気な色を失ってしまふ。「姉妹たち」で主人公の少年は、棺に入れられた「死人の枕もとには(ろうそくを)二本立てなければならぬ」とつぶやく。これがその地方の風習とするなら、パーネルの記念日に老人がろうそくを

二本立てるのは皮肉である。パーネルの死を暗示しダブリンの現状を照らしたるうそくの火で、彼を再生させる暖炉の火が弱められるからである。

火は煙草を吸ったりビール壘の栓を抜く手助けをするだけで、その火からは不死鳥でなく、気の抜けた音かとびだすのである。この音はパーネルへ捧げた礼砲だと解する人もいる。もしそうだとすれば、いかにも間の抜けた礼砲である。むしろこの音は選挙運動員たちの座談をあざ笑うかのようなものである。栓の抜ける擬声音が、日本語でポンにあたる「ポップ」(pop)でなく、人を喰った「ポック」(pok)であることは、「(トランプの)ポーカー」(poker)あるいは「(ポーカーでの)無表情な顔」(poker face)の短縮語とみられることもできる。

最初に抜ける栓はライアnzのである。彼が「どっちがぼくの壘？」と気にし、彼の壘とクロフトンのとが区別された。彼の壘の栓がとぶときの「言いわけするようなポック！」という表現から、パーネルの火が保守党員のクロフトンより国民党員のライアnzのほうを優先したのかという感じをうける。

二番目に「遅ればせながら」とぶのはクロフトンの栓で、その場面は本稿第四章に引用済みである。クロフトンは、壘を「じっと」(fixedly)見つめながら自己の殻に閉じこもっていたが、壘からの音につられてつい言葉をはいてしまう。

最後の音はハインズのパーネル哀悼詩の朗読が終わったときに起こり、気のないポック！という音は詩の空虚な美辞麗句とそれに対する拍手とに向けられたもつとも痛烈な批判になっている。

七

感傷的な歌や詩でその場の雰囲気高め、その直後に汚い現実にもどして物語を終わらせるというアンチクライマックスの手法は、ジョイス文学にしばしばみられる特徴である。ただ、他の作品ではそのような詩歌は数行だけ引用されるか言及されるかだけなのに対して、「蕩の日」では四十四行すべてが記載されている。それはこの作品が劇の性格をもっていることと関係するからである。

この十一連からなる四行詩で歌われているのは、パーネル、裏切り、父親像、聖職者、再生、火、不死鳥、酒であり、物語全体のテーマが要約されている。パーネル像を詩で明確にすることで、物語の全容が彼と関連することが鮮明になる。主題の再現であるハインズの詩や作品全体に影をおとすパーネルは、各々それぞれ自身ではなく、作品をひとつに統一する役目を果たしたことに意義がある。

ハインズの詩は、パーネルに賛辞を呈した頌詩と、その柩を前にしての挽歌と、裏切り者たちへの痛罵を浴びせた抗議詩との混合であり、おおかたの批評家が認めているとおり、紋切り型で大言壮語に満ちた三文詩といえる。しかも、詩の内容と選挙事務室での現状とを照らしてみると、その両者の懸隔が大きすぎ、そのため常套語句を羅列しただけの観念的な詩ともいえる。

まず、第一―二連ではパーネルが「残忍なる今の世の偽善者一派」の裏切りにあつて実際に死んでいるという事実を哀傷をこめ、第五―七連では「媚びへつらう坊主どもの／鳥合の衆へ引き渡した者ども」への痛憤をこめた抗議である。この抗議はハインズの詩に聞きいる者にも間接的に向けられているのだが、本人たちは気づかず平然としている。第三連ではパーネルの死で「アイルランドの心は

／悲痛に打ちのめされている」と歌いあげても、今ここでそれがあてはまるのはハインズだけである。第四、五連でパーネルならば母国の自由をかちえたであろうにと訴えているが、これはそのままパーネル亡きあとアイルランド人による自治権獲得は無理という事実を認めることになる。第八、九連ではパーネルが過去の英雄の仲間入りをし泉下で安らぐとあるが、アイルランドの先輩がいずれも裏切られたりして悲惨な死をとげているという歴史的事実を考えれば、パーネルも先輩たちも平穩に眠っているといえるであろうか。

第十連の「エリンよ、聞け、彼の御霊は／炎からよみがえる不死鳥のように、立ち昇るであろう、夜明けが訪れるときに」と、最終連の「われらに自由の治世がもたらされる日には。／その日にこそエリンは／歓喜のためにあげる杯で、ひとつの悲しみのために／乾杯しよう——パーネルの思ひ出のために」とでは、パーネルの英雄としての没落を歌っていたのが反転して、神話にもとづき、彼の再生と不死不滅を願う詩になっている。しかし、パーネルの再生を不死鳥と結びつけて願っても、ここでは弱々しい火からたちあがる唯一の霊とは壘の栓をあける気体でしかない。現実にはアイルランド人（パーネルの後継者たち）は、信念もろく、パーネルを継承しようとせず、「希望と夢」を英国王に託すありさまで、母国の「自由の治世」を望んだりはしない。選挙運動員たちの飲むのは厳かな酒ではなく、振る舞い酒である。このように、ハインズの詩における祈りにも似た未来像とパーネルの死後十一年を経過した現実とは正反対である。結局、パーネルの再生の望みはむなしくも消え、彼は素人による詩のなかで追慕されるだけの過去の栄光にすぎないのである。してみると、ジョイスは九歳のときに「なんじもまた、ヒリーよ^⑧」という詩を書いたが、ハインズに事寄せなが

ら幼少の頃にそういうパーネル哀悼詩を書いた自己への反省とも考えられる。

詩の朗読が終わると、最後の場面をむかえる。

ハインズ氏はふたたび机に腰をおろした。彼が朗読を終えてしまったときに沈黙が流れ、それからどっと拍手が起った。ライアンズ氏さえ拍手した。その喝采はしばらく続いた。それがやんでしまうとすべての聞き手は黙ったまま自分たちの壘から飲んだ。

▲ポック！▼ 栓がハインズ氏の壘からとんだが、しかしハインズ氏は顔を紅潮させ帽子をかぶらずに、机の上に腰かけたままだった。彼にはその誘いの音が聞こえないようだった。

——でかしたぜ、ジョウ！ とオコナー氏は感動を隠そうとして煙草の紙ときざみ煙草入れを取り出しながら言った。

——あんた今のどう思う、クロフトン？ とヘンチー氏は叫んだ。すばらしいじゃないか？ どうだい？

クロフトン氏はそれはとてもすばらしい作品だと言った。

朗読のあと一瞬沈黙があるのは、各々がパーネルのためにでなく、差し入れのビールで杯をあげていたことに対する反省からかもしれない。しかし、それもすぐ拍手によってうち消され、彼らは詩における告発は自分に向けられたのではないと考え、ふたたび傍観者の立場にもどる。さらに、ハインズの詩の芸術性をほめそやすことにより、その立場を一層強めている。このような態度こそパーネルを裏切るのだが、彼らはそのことに気づかない。パーネルに対する感情が、ハインズと部屋にいる他の連中とではくいちがってい

る。ここでビール壘の栓が抜ける音がする。その音が、ティアニーからの差し入れに手を伸ばさないハインズに対し、飲めという「誘い」であるのは皮肉である。この音は物語のフィナーレにおける一種のコーラスの役目をしている。ただ、全体の調子を高めるものではなく、かえって低下させる効果をもっている。それが作者の狙いである。

物語の最後でクロフトンがおぞましい答えをしたのを、今までの会話体と違って、間接語法（Mr. Crofton said that it was a very fine piece of writing.）でしめくくっていることに注意したい。彼は詩の内容に共鳴したのではなく、単にその出来具合についてお世辞を言ったのにすぎない。しかしそれが陳腐な詩であることを考えれば、保守党員のクロフトンにこのような言葉をかけたのは作者の皮肉である。したがって、間接語法による無味乾燥なこの一行にも、ビール壘の栓の抜ける音にみられたのと同じような漸降法的修辭法がある。ジョイスは幕のせりふの最後の一行（カーテンライン）の効果を用意周到に練りあげたといえよう。

この物語にかすかな救いと望みが見いだされないわけではない。そこにこの作品の最後の曖昧性がある。登場人物のほとんどがパーネルに背をむけているなかで、ハインズはパーネルに敬慕の念を抱いている。その彼が物語の終わりで哀悼詩を読むことにより、裏切りを主題とした作品の雰囲気がある程度まで和らげられる。その詩は、安っぽくても全編に哀愁が漂っていて、彼の誠実さが感じられる。それがこの作品を皮肉のままに終わる後味の悪さから救っている。火も弱くて心細いが、最後まで消えないでどうにか残っている。擬人化された火は途中でヘンチーが消しそうになると「ジュエッと音をたてて抗議」する。火種があるかぎり、余燼が煽られて、

燃えあがるときがくるかもしれない。それはアイルランドが復活するときであり、その可能性を残して幕となる。

以上のように、「蕩の日」においても作者のリアリズムは巧みでまた徹底している。そのため、ダブリンの一選挙事務所内の、ある夕方の出来事が卑近なものとしてわれわれの眼前に浮かびあがり、われわれは人物たちの卑俗な人間性に反発と共感を同時に覚える。そして、ジョイスの描くダブリンが特定の場所でありながら、あらゆる場所の縮図でもあることを悟るのである。「蕩の日」は作者の人間観察の勝利にほかならなう。

注

- ① F. C. Stern "Parnell Is Dead," T. F. Staley (ed.): *James Joyce Quarterly* vol. 10, no.2, (Oklahoma: Univ. of Tulsa, 1973), p. 228.
- ② D. T. Torchiana: *Backgrounds for Joyce's "Dubliners"*, (Boston: Allen & Unwin, 1986), p. 180 参照。
- ③ H. O. Brown: *James Joyce's Early Fiction: The Biography of a Form* (Cleveland: The Press of Case Western Reserve Univ., 1972), p. 26 参照。
- ④ M. Magalaner and R. M. Kain: *Joyce: The Man, the Work, the Reputation* (New York: New York Univ. Press, 1956; 1969), p. 80 参照。
- ⑤ *James Joyce Quarterly*, vol. 10, no.2, p. 234^f E. San. Juan, Jr.: *James Joyce and the Craft of Fiction: An Interpretation of "Dubliners"* (New Jersey: Fairleigh Dickinson Univ. Press, 1972), p. 170 参照。このように火を「マガラナーは、金と酒だけに執心するダブリンの亡者たちの墮落した世界を照らす地獄の火に見たてて、

- る。強姦事件はマンントの『神曲』に於ける地獄を構ったものだとする
 のである。Joyce: *The Man, the Work, the Reputation*, pp. 81-
 2 参照。このふたつは区別する批評家がある。W. Y. Tindall: *A
 Reader's Guide to James Joyce* (London: Thames and Hudson,
 1971), p. 35' W. Beck: *Joyce's "Dubliners": Substance, Visions
 and Art* (Durham: Duke Univ. Press, 1969), p. 245 参照。
 ⑥ E・ホロナーのこの語はマンントを賛成している。Joyce: *The
 Man, the Work, the Reputation*, p. 82 参照。
 ⑦ *A Reader's Guide to James Joyce*, pp. 35-6' R. Scholes and
 A. W. Litz (ed.): *James Joyce, "Dubliners": Text, Criticism, and
 Notes* (New York: Viking Press, 1969), p. 309 参照。
 ⑧ T・M・ヒーリーは、バーネルの補佐官で、ヘインズの詩の第一連で
 の「われらの無冠の王」というあだ名をバーネルにつけたが、のちに彼
 を裏切ったことがある。
 ⑨ この有名な手法はマンヴァントやマローベールの影響である。

James Joyce's "Ivy Day in the Committee Room"

Yoshitaka Yonemoto

"Ivy Day in the Committee Room" is the most difficult story in *Dubliners*.

First, the story is colorless enough. It mostly consists of dull conversations between a handful of political canvassers, centring on the subjects of politics. The narrative refuses to give information relevant to what is happening from moment to moment, and to go behind a series of actions and explain them; that is, it makes no mention of the individual attitudes and minds of the characters.

Secondly, as many as eight characters appear in this short story and fifteen other persons are talked about by them. There exists no central character. Thus, we are wearied by appearance of such various persons.

Thirdly, their utterances, it seems, are exclusively impromptu questions, answers and remarks. At the first reading, therefore, we are left with bad impressions that "Ivy Day in the Committee Room" is a desultory work.

But, if we read carefully by use of our knowledge and imagination, we can know that interweaving of their utterances and development of their topics converge into thematic concentration on political paralysis in Dublin.

Like a one-act play, this story has the 'Aristotelian unity of time and place,' and the greatest possible amount of dialogue. We are given, in direct speech with a single exception, what eight characters say, or, in objective explanation by the narrator, what they do and how they look.

After all, "Ivy Day in the Committee Room" is a short story with a strong element of the play. In this paper, I would like to mainly discuss the dramatic effect of the work.